東京女子医科大学病院
病院案内

令和5年度版(2023～2024)

HOSPITAL GUIDE

TOKYO WOMEN'S MEDICAL UNIVERSITY HOSPITAL

ごあいさつ

病院長 **板橋 道朗**

東京女子医科大学の基盤となる理念は、「至誠と愛」です。「きわめて誠実であること」「慈しむ心（愛）」は教育・研究・診療の総ての場において求められています。この理念に従って附属病院も運営され、その伝統は先人から若い先生方へも脈々と引き継がれています。

高度で適切な治療を提供するために、当院には約50の診療科があり、カテーテル治療や内視鏡治療のほか、手術件数は年間約10,000件、ロボット支援手術件数も年間約600例、腹腔鏡手術などの低侵襲手術症例数も豊富で国内でも有数な高度医療を提供しています。

また、高度医療の提供だけでなく、患者さんに満足していただくことも大切です。さまざまな病気を抱えた患者さんが安心して受診していただき、病院を出る時には希望をもって、笑顔で帰宅いただけるような病院運営を行うべく職員一丸となり昼夜努力しています。

研究では各診療科で新しい領域での研究が行われています。また、大学全体として組織横断的研究ができるよう、基礎と臨床、臨床部門同士、あるいは早稲田大学と共同施設であるTWINsでも研究が行われています。

医学部教育では、「医学の蘊奥を究め兼ねて人格を陶冶し社会に貢献する女性医人を育成する」という建学の精神の基、医学部、看護学部とも協力して卒前、卒後教育を行っています。

今後も安心と安全を最優先して、患者さんファーストで患者さんに優しい、かつ高度な医療と教育・研究を行います。

CONTENTS

基本理念・基本方針・「5S」の精神……4

沿革……5

概況……6

病院組織図……7

診療部門紹介……8

外来案内……25

病棟案内……26

構内見取図……27

基本理念

患者視点に立って、安全・安心な医療の実践と高度・先進な医療を提供する。

基本方針

1. 誠実な慈しむ心（至誠と愛）をもって、患者視点に立った、きめ細やかで温かい心の通った医療を実践します。
2. 先進医療の推進や高度医療の提供に尽力し、質の高い安全な医療を提供します。
3. 医療連携をとおして地域医療により一層貢献します。
4. 明日を担う人間性豊かな医療人の育成を目指し、充実したカリキュラムや実践的な研修プログラムを実施します。
5. 本学の特性を活かして女性医療人を育成し、働く環境を創出します。

「5 S」の精神

沿革

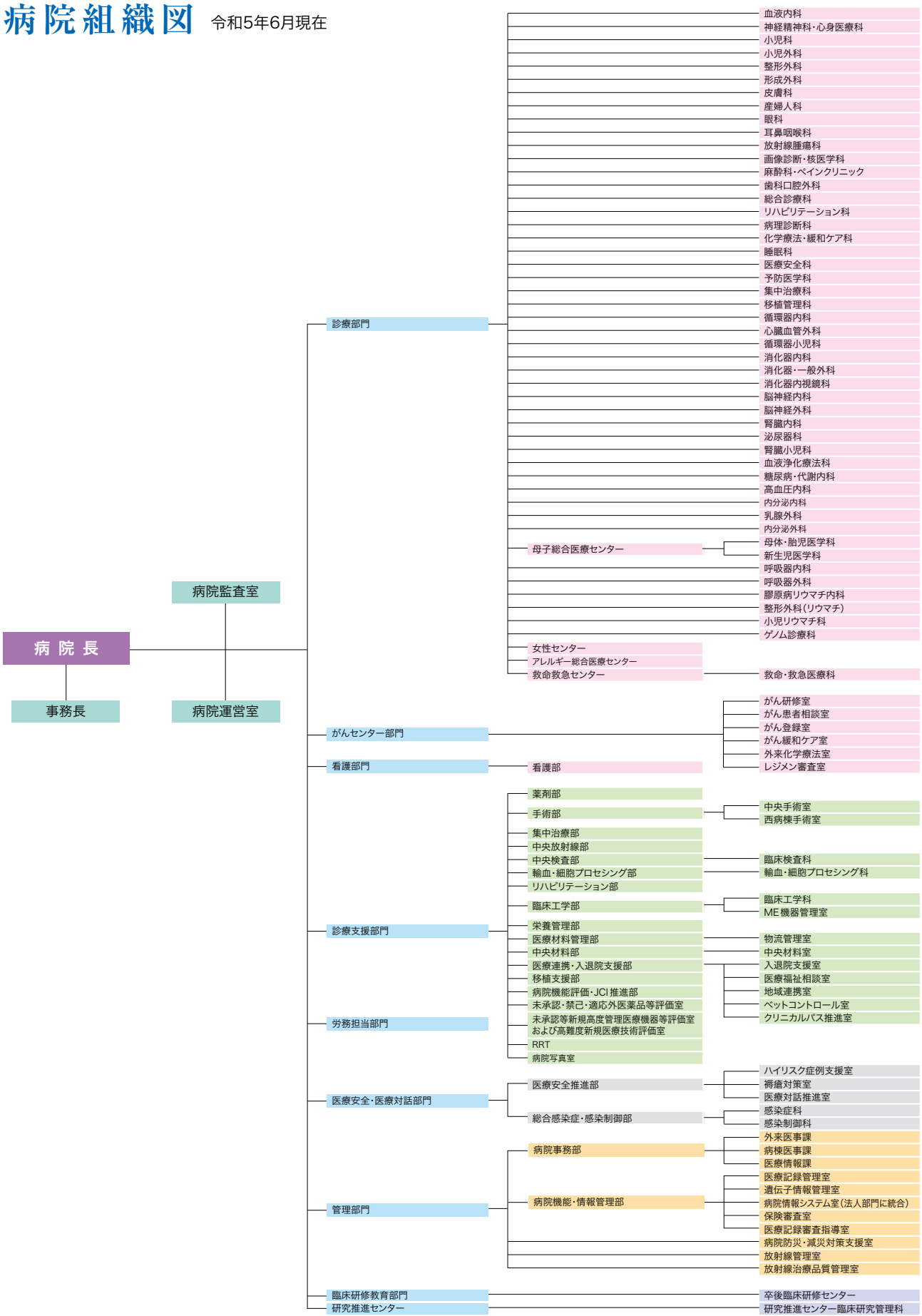
明治	明治33年(1900年)12月	東京女醫学校創設(5日:創立記念日)
	明治37年(1904年)7月	私立東京女醫学校設立認可
	明治37年(1904年)9月	東京至誠医院設置
	明治41年(1908年)12月	附属病院開設許可
	明治45年(1912年)3月	私立東京女子医学専門学校設立認可
大正		
昭和	昭和5年(1930年)12月	附属病院竣工
	昭和11年(1936年)10月	第二病棟竣工
	昭和27年(1952年)4月	新制東京女子医科大学発足
	昭和30年(1955年)5月	附属日本心臓血圧研究所(のち心臓病センターと改称)設置
	昭和40年(1965年)4月	附属日本心臓血圧研究所(のち心臓病センターと改称)竣工
	昭和40年(1965年)4月	附属消化器病・早期がんセンター(のち消化器病センターと改称)設置
	昭和42年(1967年)10月	神経精神科病棟竣工
	昭和42年(1967年)12月	附属消化器病センター竣工
	昭和46年(1971年)10月	附属脳神経センター竣工
	昭和50年(1975年)7月	糖尿病センター設置
	昭和53年(1978年)3月	中央病棟竣工
	昭和54年(1979年)4月	腎臓病総合医療センター設置
	昭和55年(1980年)7月	東病棟竣工
	昭和59年(1984年)4月	内分泌疾患総合医療センター設置
	昭和59年(1984年)9月	母子総合医療センター設置
	昭和62年(1987年)3月	糖尿病センター竣工
平成	平成元年(1989年)4月	救命救急センター設置
	平成2年(1990年)10月	呼吸器センター設置
	平成15年(2003年)3月	総合外来センター竣工
	平成21年(2009年)12月	第1病棟竣工
	平成28年(2016年)9月	教育・研究棟竣工
令和	令和2年(2020年)2月	彌生記念教育棟、巴研究教育棟竣工

概況

令和5年6月現在
＊内容は、適宜更新します。最新の情報は、病院のホームページをご覧ください。http://www.twmu.ac.jp/into-twmu/

開設者	学校法人　東京女子医科大学
病院長	板橋　道朗
副院長	川俣　貴一　（診療部門担当） 多賀谷　悦子　（診療部門担当） 田畑　務　（診療支援部門担当） 大月　道夫　（診療支援部門（広報）・看護部門担当） 西村　勝治　（管理部門・臨床研修教育部門担当） 世川　修　（医療安全・医療対話部門担当） 村崎　かがり　（労務部門担当）
看護部長	近藤　芳子
薬剤部長	浜田　幸宏
事務長	小林　秀夫
許可病床数	1,190床　（一般：1,144床　精神：46床）
職員数 （令和4年4月現在）	医師　762名 看護師　1,033名 その他　669名 合計　2,464名
患者数 （1日平均）	外来患者数　入院患者数 令和2年　3,153人　777人 令和3年　3,265人　697人 令和4年　3,051人　632人
機能	●救急告示病院　●公害医療機関 ●臨床研修指定病院　●臨床修練指定病院 ●災害拠点病院　●エイズ治療拠点病院 ●神経難病医療拠点病院　●治験拠点医療機関 ●肝臓専門医療機関　●移植認定施設（心臓・小児心臓・腎臓・膵臓・肝臓・骨髄・末梢血幹細胞） ●東京都脳卒中急性期医療機関　●総合周産期母子医療センター ●東京DMAT指定病院　●東京都小児がん診療病院 ●東京都難病診療連携拠点病院 ●東京都アレルギー疾患医療専門病院
保険医療機関承認	平成30年10月1日～令和6年9月30日

病院組織図 令和5年6月現在



診療部門紹介

血液内科
Department of Hematology

血液内科では、急性ならびに慢性白血病、骨髄異形成症候群、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、多血症などの骨髄増殖性疾患、溶血性貧血、再生不良性貧血をはじめとする種々の貧血、特発性血小板減少性紫斑病など幅広い血液疾患の診療にあたっています。移植治療に関しては、白血病には血縁者間造血幹細胞移植ならびに骨髄バンクや臍帯血バンクを介した造血細胞移植や臍帯血移植を、悪性リンパ腫や多発性骨髄腫には主に自家末梢血幹細胞移植を精力的に行っております。外来では常時４人前後の血液内科専門医が診療できる体制をとっております。大学病院という特色を生かし、幅広い領域の血液疾患について、他科と連携しながら個々の患者さんに適した医療の提供を目指しております。さらに難治性疾患に対する新規治療法導入や臨床治験に積極的に取り組んでおります。日本血液学会研修施設、日本骨髄バンク認定施設、日本造血・免疫細胞療法学会認定移植施設であり、血液腫瘍を含むがん診療全般に関する種々の業務・支援体制が確立しております。

神経精神科
Department of Psychiatry

心の病は国民の健康を脅かす5大疾病のひとつであり、統合失調症、双極性障害、うつ病、不安障害、器質性精神障害などが含まれます。神経精神科は閉鎖病棟を有し、難治性疾患を含む、これら多様な精神障害に対する治療を軽症例から重症例まで幅広く行っています。治療のゴールを病気からの回復と社会参加の促進に置き、現代の精神科医療が到達した最も標準的でバランスの取れた医療の提供を目指しています。具体的にはエビデンスに基づく薬物療法、個別性を重視した心理療法、心理教育、精神科リハビリテーション等からなる包括的なアプローチです。チーム医療を重視し、医師、看護師、公認心理師、作業療法士、薬剤師、精神保健福祉士からなるスタッフが協働して日々の診療にあたっています。また、高度医療を担う大学病院という特性上、コンサルテーション・リエゾンにも力を入れており、がんをはじめとしたさまざまな病気で治療中の患者さんに対して、心のケアを行っています。この活動は精神科リエゾン・チームが中心となって、各診療科と連携して進めています。

小児科
Department of Pediatrics

小児科は、初診時の年齢が主に15歳未満の内科疾患全般を対象とし、全身を診ることができる数少ない診療科の一つです。「子どもは常に成長・発達している」ということが、おとなとの最も大きな違いであることから、常に子どもの成長発達過程に留意した診療を心がけています。外来診療は、原則として、午前中が主に一般外来、午後は、神経、筋、てんかん、アレルギー、発育・発達、内分泌、栄養・消化器などの専門外来としています。但し、緊急性のある疾患については、予約外、時間外来にも積極的な対応を心がけています。また、新型コロナウイルス感染に対しても対策を徹底しております。大学病院として、遺伝子治療、分子標的治療などの先端医療を推進する一方、循環器小児科、腎臓小児科、新生児科、小児外科、脳外科小児グループなど小児専門各分野と連携して包括的診療体制を展開しています。

小児外科
Department of Pediatric Surgery

小児は成人のミニチュアではなく、小児医療は高い専門性をもった領域です。小児外科診療科は、都内でも有数の日本小児外科学会の認定施設であり、年間250例以上の小児外科手術を行っています。対象疾患は、出生直後の新生児期から学童期（15歳未満）までの頭頸部・呼吸器・消化器・泌尿生殖器・内分泌臓器・小児腫瘍など、小児にみられる外科的疾患を広い範囲で取り扱っております。15歳以上であっても、先天性疾患の場合は小児外科で対応可能です。先天性の疾患だけでなく、外傷や生後発現する疾患も同じように小児外科指導医・専門医が治療をいたします。特に、日本内視鏡外科学会技術認定取得医（小児外科領域）による腹腔鏡・胸腔鏡を用いた小児内視鏡外科手術や、消化器内視鏡診断・治療には30年以上の実績があり、新生児も含めた多くの疾患に対する診断・治療が低侵襲に行われています。また、小児科、腎臓小児科、循環器小児科、母子総合医療センター新生児部門、脳神経外科（小児グループ）などの、院内小児関連各科との密接な協力体制のもと、小児チーム医療における外科部門の中心的役割を担っています。

整形外科
Department of Orthopedic Surgery

手足、体幹に痛みや機能障害をもたらす骨関節、筋肉、神経などの運動器疾患を治療します。これらの疾患は人口の高齢化に伴い増加し、QOL(クオリティ・オブ・ライフ・生活の質)の低下を招きます。腰痛や関節痛によって、歩くこと、スポーツやレジャーを楽しむこと、労働することなどに不自由を感じている方は増えています。整形外科は全身の運動器すべてを扱うため、当科では、膝関節、股関節、脊椎、肩肘関節、手の外科、足の外科、骨粗鬆症、関節リウマチ、骨軟部腫瘍などの各分野にエキスパートの医師がおり、一般的な疾患はもちろん、難治疾患などにも対応しています。例えば変形性関節症に対する人工関節置換術や骨切り術、半月板や靱帯損傷に対する関節鏡視下手術、脊椎変性疾患に対する徐圧矯正固定術、脊椎内視鏡手術、肩関節疾患に対する関節鏡視下手術や人工関節置換術、上肢の外傷や神経軟部疾患に対する手術、リウマチによる手足変形の手術などを多数行っています。専門外来の受診には混雑が予想されますのでお近くの医療機関からの紹介状をお持ちください。

形成外科
Department of Plastic and Reconstructive Surgery

形成外科とは、体表外科ともいわれるほど体の表面すべてに携わる外科です。口唇、口蓋裂、指趾の変形(多指〔趾〕・合指〔趾〕症)漏斗胸などの先天異常の治療や、種々の「あざ」や「しみ」に対するレーザー治療、指切断に対するマイクロサージャリーを用いた再接着術、乳房再建などがん切除後の再建術、そして重症から軽症までのやけどの治療を行っています。ケガによるキズやキズ跡をきれいにするために、最新の医療技術にも取り組んでいます。最近では瞼(まぶた)のたるみや下垂を治したりする眼瞼下垂や、レーザーや美容外科手術などのいわゆる「若返り治療」も盛んに行われております。

皮膚科
Department of Dermatology

皮膚科では午前中あらゆる皮膚疾患(湿疹、水虫、イボ、皮膚がんなど)の初診および再診患者さんを診療しています。初診はなるべく紹介状をご持参いただきたいと思いますが、紹介状なしでも診察致します。午後はパッチテスト、乾癬、蕁麻疹、膠原病、アトピー性皮膚炎、水疱症、レーザー治療(しみ、あざ、ほくろ)、小手術(小腫瘍)などの専門外来も開設しています。その他、皮膚生検(皮膚病の一部を小さく切除して組織検査を行うこと)が必要な場合は火曜日と木曜日の午後に行っています。専門外来の受診や皮膚生検は、一度午前中の一般外来を受診していただいてから、ご予約をお取りする形で行っております。
またシミ、イボなど美容に関するご相談、治療は水曜午前の女性科皮膚科(自費)でもお受けしています。病院HPから直接女性科皮膚科でご予約いただくか、皮膚科外来でご相談ください。難治な皮膚病からニキビやシミなどの美容的な問題まで幅広く診療しており、常に新しい治療薬剤・技術の導入を心掛けています。

産婦人科
Department of Obstetrics and Gynecology

産婦人科の分野は腫瘍、周産期、生殖、女性医学の4つの分野に分かれます。当教室では、それぞれの分野の教授がそろい、先進的な診療を行っています。近年、分娩年齢の高年齢化と悪性腫瘍発症年齢の若年化により、未婚の悪性腫瘍患者や悪性腫瘍合併妊婦が増えています。例えば、悪性腫瘍を患った妊婦を母児共に救命するには、がん治療はもちろんのこと、周産期やNICUだけでなく生殖医療の先進的な技術が必要です。我々はこれまで合併症妊娠などに対する豊富な周産期診療の経験を有し、生殖内分泌の技術に加え、腹腔鏡の専門医も多数在籍しています。今後は、生殖機能を温存したがん治療を教室の柱として、周産期、生殖、腫瘍の専門医がチーム一丸となって、診療に取り組んでまいります。

眼科
Department of Ophthalmology

患者さん一人一人により良い視機能(クオリティ・オブ・ヴィジョン:QOV)を提供できるように、当科では各々の患者さんに最も適した眼科診療を行っています。外来診療では一般眼科診療の他に、黄斑・網膜・硝子体、角膜、ドライアイ、涙器疾患、緑内障、ぶどう膜炎、神経眼科、斜視弱視、未熟児、小児眼科、色覚、ロービジョンなどの各専門分野で、診断機器と治療装置を備えて、特徴ある治療で実績を積み重ねています。特に、失明につながる加齢黄斑変性などの黄斑疾患の治療に力を入れており、「黄斑疾患総合ケアユニット」で専門性の高い診療を総合的に行っております。また、白内障、網膜剥離や黄斑疾患などの網膜硝子体疾患をはじめ、様々な疾患に対して、視機能の回復を目指して、患者さんにとってより良い手術を積極的に行っています。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科
Department of Otorhinolaryngology - Head and Neck Surgery

耳鼻咽喉科では鎖骨から上で脳と眼球を除く頭頸部の範囲を扱います。耳と鼻、咽喉（のど）の病気に加えて、聴覚、平衡覚、嗅覚、味覚という感覚器の疾患、顔面神経麻痺、咽喉頭の疾患、摂食・嚥下や発声の問題、唾液腺疾患そして頭頸部領域に発生する腫瘍の診断と治療を行っています。
中耳疾患に対する鼓室形成術やアブミ骨手術など、鼻副鼻腔疾患に対する内視鏡下鼻内手術を多数行っています。
喘息合併のよくみられる好酸球性中耳炎や好酸球性副鼻腔炎は、当院呼吸器センターと協力して気道全体のトータルケアを行い、手術を含めた治療成績が向上しています。他に専門外来として、アレルギー、小児難聴、補聴、口腔乾燥・味覚外来、頭頸部腫瘍外来があり、QOL（クオリティ・オブ・ライフ）の改善を重視した治療を目指しています。

放射線腫瘍科
Department of Radiation Oncology

放射線腫瘍科は年間約700人の悪性腫瘍患者さんの放射線治療を行っています。対象疾患は脳腫瘍、頭頸部がん、乳がん、肺がん、食道がん、肝がん、膵がん、直腸がん、子宮頸がん、前立腺がん、悪性リンパ腫、白血病など多岐にわたっています。保有する治療機器は外部照射用高精度リニアック3台（コーンビームCTつき3台）、腔内／組織内照射用イリジウムリモートアフターローディングシステム1台で、X線撮影とCT一体型位置決め装置1台と多数の治療計画装置が導入されています。
高精度放射線治療としては、肺腫瘍や肝腫瘍に対する定位放射線治療、脳腫瘍、前立腺がん、食道がん、肺がん、膵がん、肝がん、頭頸部がん、直腸がん、子宮頸がんなどに対する強度変調放射線治療、画像誘導放射線治療を積極的に実施しています。当科の特徴は、神経膠腫、小児脳腫瘍に対する放射線治療の患者数が多いこと、前立腺がんに対して強度変調放射線治療ならびに寡分割照射や定位照射を実施できること、乳がんに対する寡分割法などの多様な選択肢を用意していること、粒子線治療のコンサルタントができること、医学物理士による治療の品質管理をシステム化して行っており、安心して治療を受けられることです。

画像診断・核医学科
Department of Diagnostic Imaging and Nuclear Medicine

画像診断・核医学科は、従来の放射線科業務の3本柱である、画像診断、核医学、放射線治療の中の、画像診断と核医学を受け持つ診療科です。画像診断では、単純X線撮影、マンモグラフィー、CT、MRIの読影や、超音波や血管撮影の検査および診断を行っています。また、CTや超音波検査を用いた細胞診や組織診と腫瘍ドレナージに加え、血管内治療などのインターベンショナルラジオロジー（IVR）も担当しています。核医学では、昔から広く行われている骨シンチ、ガリウムシンチなどの一般核医学から、SPECTによる心臓や脳神経の機能診断、PETを用いた分子イメージングを担当しています。さらに放射性同位元素（RI）を用いた治療では、ヨード（I-131）によるバセドウ病や甲状腺がんの治療、塩化ラジウム（Ra-223）による骨転移治療、ゼバリン（Y-90）による悪性リンパ腫の治療を、各診療科と連携して行っています。以上のような業務に対し、診療放射線技師や看護師とも連携し、チーム医療を実践し、専門性が高くかつ安全な医療の実現に努めております。

麻酔科・ペインクリニック
Department of Anesthesiology

東京女子医科大学麻酔科・ペインクリニックでは、術前から術後にかけて、麻酔の方法や薬剤など沢山の選択肢の中から患者さんお一人お一人に合う医療を実施しています。
周麻酔期の病態生理・薬理学を麻酔科診療の中心に据え、術前外来での診療方針の策定とインフォームドコンセント、手術室での複雑な全身管理、集中治療、ペインクリニック、Acute Pain Service (APS)、無痛（麻酔）分娩、緩和医療などの広範囲にわたる診療を行なっております。
当院で麻酔に携わるスタッフは、従来の麻酔科専門医・研修医と手術室看護師の体制に加え、麻酔科診療看護師、周術期専属の薬剤師、手術室に特化したエンジニアなど幅広い部門のチームで構成されております。手術室の麻酔の安全だけでなく、術前から術後までの周麻酔期に患者さんお一人お一人に喜んでいただけるような医療を志しております。ご質問等ありましたら、いつでもお声がけください。

歯科口腔外科
Department of Oral and Maxillofacial Surgery

歯科口腔外科では、歯、口、顎骨の疾患の診断と治療を行っております。親知らず(智歯)、歯が原因の炎症、歯根や顎骨のう胞、良性腫瘍や悪性腫瘍(がん)、顎変形症(骨格的な不正咬合)、顎関節症、顎関節疾患(脱臼、強直症)、歯や口の中の外傷、顎の骨折など口腔外科全般の診断と治療を口腔外科専門医が行います。口腔がんの治療は、形成外科、放射線腫瘍科、化学療法・緩和ケア科などの院内各科と連携を図り治療を提供しております。歯科矯正治療は矯正歯科専門医が担当します。顎変形症治療は、保険診療が適応され、歯科矯正と手術を併用してかみ合わせを治します。親知らずの抜歯や歯根のう胞摘出術などは外来で口腔外科専門医が安全に行います。学会認定研修施設として、歯が欠損している部分に自分の歯のようにかめる歯科インプラント(人工歯根)の治療にも力を入れております。
また、心臓病、糖尿病、腎臓病、血液疾患の患者さんの抜歯などは院内他科と連携し治療にあたっています。特にワーファリンなどの抗凝固薬、アスピリンなどの抗血小板薬による経口抗血栓療法中の患者さんの抜歯は薬を中止することなく行っており、安全のために入院して抜歯を行うこともあります。さらに、当院睡眠科と連携し、睡眠時無呼吸症の治療のために口腔内装置の作製と口腔機能低下症の診断と治療を行っております。以上のように幅広い口腔疾患に対して、高い専門性と安全な医療を提供しております。

総合診療科
Department of General Medicine

自分たちでいろいろな病気を横断的に診るだけではなく、医療や保健、福祉の部門の力を借りつつ皆様をケアします。高度先進医療を提供しないことが多いですが、その包括的なケアや他の部門との連携を重視しています。場合によっては他の医療福祉施設などとの連携を配慮していきます。家族や地域を診る視点も重視しています。
取り扱うおもな疾患は、診断がつかない、または多くの疾患がある、多臓器に係るような疾患に罹っていらっしゃる患者さんで、専門診療よりも当科がふさわしいと考えられる場合に診させていただいております。年齢や性別、臓器を問わず診療させていただいておりますが、高度で特殊な医療や治療は行えません。
学生や若い先生の教育に力を入れております。また診察においても皆様のご協力を仰ぐことも多々あるかもしれません。
皆様のニーズに合った医療を心掛けつつ、少子高齢化する未来の日本に合致した医療を模索したいと考えております。

リハビリテーション科
Department of Rehabilitation Medicine

各科からの依頼により、入院患者と外来患者さんに対して病気やケガにより生じた障害の治療を行っています。リハビリテーション科医、理学療法士(PT)、作業療法士(OT)、言語聴覚士(ST)のチーム医療で、機能障害や能力低下をできるだけ軽減し、患者さんが元の生活にできるだけ近い形で復帰できるように依頼科とも連絡をとりながら進めています。リハビリテーション科医師による診察・障害の評価の後、理学療法(筋力強化、基本動作訓練、歩行訓練など)、作業療法(上肢の機能訓練、日常生活動作訓練、認知機能訓練など)、言語療法、嚥下訓練などの治療、生活指導、家族への介助指導などを行っています。当院の特徴は急性期の患者さんに対してICUやベッドサイドよりリハビリテーションを開始していることです。また、神経や骨関節の病気だけでなく、循環器や呼吸器、がんなど多種にわたる病気に対して治療しています。重症の患者さんも多いため、リハビリテーション中のリスク管理には特に注意を払っています。

病理診断科
Department of Sueginal Pathology

病理診断科は以下の業務を通じ、女子医大病院の医療に貢献しています。

1. 組織診断:生検または手術によって採取される組織を肉眼および組織学的に検討し、診断を行います。年約13,000件。一部の症例では最適化・個別化医療のため、症例ごとに分子標的治療の適否を検討しています(コンパニオン診断)。ゲノム診療にも参画しています。
2. 細胞診断:喀痰、尿、甲状腺や乳腺腫瘍などから採取される細胞を検討し、疾患の推定診断を行います。年約8,000件。
3. 術中迅速診断:手術中に採取された組織や細胞から標本を作製、検体提出後15-20分のうちに診断を行います。年約1,000件。
4. 各診療科との症例検討会や研修医教育プログラムへの参画(特に全学臨床病理症例検討会の運営)。これらの業務を通じ、病理専門医、細胞診専門医、細胞診断士を育成します。また臨床病理学的研究を推進し、各診療科や初期研修医、学生からの学会、論文発表などの学術的発信を支援しています。
5. がん遺伝子パネル検査のための試料作製、データ解析のためのエキスパートパネルに参加しています。

化学療法・緩和ケア科
Department of Chemotherapy and Palliative Care

化学療法・緩和ケア科は、がんや肉腫など、あらゆる悪性腫瘍の患者さんを対象とし、化学療法（抗がん剤治療）や症状緩和治療、緩和ケアを行う科です。積極的ながん治療の一つである化学療法と、症状緩和治療、緩和ケアの両方を専門とし、同時に実践しております。ひとつの臓器のみを対象とする診療科とは異なり、がんや肉腫、重複がんや原発不明がんなどのまれな疾患にも対応し、最新の知見に基づいた抗がん治療を積極的に行っております。標準治療はもちろん、合併症のある患者さんなど、個々の患者さんの特性に合わせて、抗がん治療の効果を最大限に得られるよう、副作用を最小限に抑えるよう常に配慮して治療を進めていきます。
また、緩和ケアは末期の患者さんだけの治療ではありません。症状緩和治療、緩和ケアを早期に始めて、がんによる身体的・精神的な苦痛を可能な限り軽くしながら、同時に積極的な抗がん治療を行うことが現代のがん治療のスタンダードです。病気が進行してしまった患者さんに対して、根治や病勢を抑えることを目指す治療ができなくなったとしても、その状態から患者さんのために何ができるのか、患者さんが何を治療の目標とするのかを共に考え、道しるべとなるように、他科の医師や看護師、薬剤師、ソーシャルワーカー、地域の医療スタッフなどとチームで対応していきます。

予防医学科
Department of Preventive Medicine

予防医学科では会員制の健康診断プログラムを実践しています。大学病院ならではの最新の医療設備を駆使した質の高い検査を実施し、後日行われる生活指導との組み合わせで、数値のみの判断ではなく、全人的な健康診断結果を提供しております。
近年では、がん検診の効果を科学的な方法で評価したうえで実施するのが、国際標準となっております。当科では、厚生労働省の「がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針」に定められた、がん死亡率の減少について、科学的根拠のあるがん健診を中心に、受診者の皆様のニーズに合わせプログラムを構築しております。また、健康診断の後に受けて頂く生活指導では、健康診断の結果をお伝えするだけではなく、生活習慣病進行予防を介し、動脈硬化性疾患発症、進展予防を目指しており、専門的かつ、きめ細かな指導を行っています。
健診により何らかの問題が見つかった場合は、当院の専門診療科にご紹介し、迅速な対応を受けることができるようお手伝いいたします。
我が国の疾病構造が変化してゆく中、さまざまな疾患やそれらの危険因子の疫学的動向を的確に把握し、最新の医療をもって受診される皆様のニーズにお答えできるよう、スタッフ一同一丸となって、予防医学を展開してまいります。

睡眠科
Division of Comprehensive Sleep Medicine

当科の前身は、東京女子医大附属青山病院睡眠総合診療センターで、2010年より睡眠時無呼吸症候群を中心とした睡眠呼吸障害、むずむず脚症候群、レム睡眠行動障害、ナルコレプシーなどの過眠症、不眠症などの睡眠障害の検査、診断、治療を行ってまいりました。
近年、24時間社会、IT化がすすみ、また食の欧米化、運動不足などライフスタイルの変化により、不眠、睡眠覚醒概日リズム障害、睡眠時無呼吸症候群などの睡眠障害をきたす患者さんが増えています。睡眠障害は、事故やヒューマンエラーなど社会的問題、うつなどの気分障害、生活習慣病と密接に関係し、総合的、専門的に診断、治療していくことが重要です。当科では、睡眠医療、循環器内科の専門医が診療にあたり、精神科、歯科口腔外科、耳鼻科、神経内科、呼吸器内科など多数の診療科と連携をとりあっています。入院検査では、終夜睡眠ポリグラフィー検査（PSG）、昼間の眠気を客観的に評価、検査するMSLT（反復睡眠潜時検査）を施行いたします。閉塞性睡眠時無呼吸症候群では、持続陽圧呼吸（CPAP）の導入、定期通院や歯科口腔外科での口腔内装置による治療を行っています。睡眠に関する悩みがあればお気軽にご相談ください。月～金曜日に初診を受けておりますが、完全予約制になっておりますので、初診・再診ともに当院予約センターまでご連絡ください。睡眠検査入院をご希望の場合も、まず初診外来で承ります。

集中治療科
Department of Intensive Care Medicine

集中治療室（ICU）は、病院内の施設の核となる部門の一つで、呼吸、循環、代謝その他の重篤な急性臓器不全の患者を24時間体制で管理し、より効果的な治療により回復させることを目的としています。集中治療科医が管理と診療チームのリーダーとなり、ICU看護師とともにICUベッド18床を運用し、各診療科の高度な治療をサポートしています。また、多職種チーム（医師、看護師、臨床工学技士、理学療法士、薬剤師、管理栄養士など）で治療計画を共有・協働し、幅広い年齢層と多彩な急性期病態の対応に努めています。当院は、難易度の高い手術や他の医療施設では対応できない複雑な疾患を合併する患者様の手術が多く、そのような患者様の術後を中心とした周術期管理や、院内で内科的治療中に併発した急性呼吸・循環不全や敗血症性ショックなどに対して、人工呼吸器管理、血液浄化療法、ECMOや機械的循環補助法など、高度な機械的生命維持装置を駆使して治療を行っています。さらに院内急変対応チーム（RRT）や呼吸ケアチーム（RST）を編成し、病院の医療安全に貢献しています。関連病院のみならず、他施設からも積極的に各診療科を通して患者様を受け入れておりますので、まずは該当診療科へご連絡ください。

移植管理科
Department of Organ Transplant Medicine

東京女子医科大学病院は、心臓、腎臓、肝臓、膵臓、膵腎同時、肝腎同時の臓器移植を行うことのできる本邦では数少ない多臓器移植施行病院として日本臓器移植ネットワークに登録されており社会的にも非常に重要な役割を担っています。また、生体腎移植や生体部分肝移植のような生体ドナーからの移植数においても全国有数の症例数を誇っており本邦における移植医療を担う中核的な施設となっています。これまでは室長(兼任)以下、各専門分野の移植コーディネーター4名およびドナーコーディネーター1名が各診療科に分散している形で運営されてきました。今後は臓器横断的に以下のような業務を移植管理科が中心になって取り組んでまいりたいと考えております。

①移植待機患者(日本臓器移植ネットワーク)の管理
②臓器移植患者のデータ報告
③移植前後における臓器移植検討会の開催
④普及啓発に関する業務(日本臓器移植ネットワークとの連携)
⑤臓器移植に関係する免疫学的検査の質の担保

循環器内科
Department of Cardiology

当科は、虚血性心血管疾患、不整脈、心筋症、心不全、弁膜症および大血管疾患など、循環器疾患全般の診断・治療を行っています。循環器領域の黎明期であった1967年にわが国で最初に創設された冠動脈集中治療室（CCU）では、現在は虚血性心疾患の治療にとどまらず、心臓移植を視野にいれた重症心不全の治療にも精力的に取り組んでいます。急性心筋梗塞や狭心症に対する心臓カテーテル治療・下肢を中心とした全身の血管に対してのカテーテル治療に加えて、心臓血管外科との緊密な連携のもと、手術困難な重症弁膜症に対するカテーテル治療（TAVI, MitraClip）も積極的に行っており、全国でも数少ない指導施設の１つとなっています。これら心血管カテーテル治療全体での症例数は2019年に年間1000例を超えるところとなりました。不整脈領域でも、頻脈性不整脈に対するカテーテルアブレーションは年間約400例、また心臓ペースメーカー・植込み型徐細動器（ICD）・重症心不全に対する心臓再同期療法機能付植込み型徐細動器を用いた治療も総計で約300例を数え、大学病院としてはトップクラスの症例数を誇ります。今後も、冠動脈疾患、末梢血管疾患、不整脈、心不全、弁膜症、大血管疾患、人工弁、先天性心疾患など、各分野のエキスパートによる専門外来とその相互の連携を円滑に行うことで、常に日本で最高の医療を提供し続けることを目指して、患者さまのための全人的医療に取り組んでまいります。

心臓血管外科
Department of Cardiovascular Surgery

当科は1949年に榊原 仟先生が東京女子医学専門学校へ赴任され、外科学講座を開かれたことに源を発し、2019年に開講70周年を迎えました。この間、榊原先生の手によって本邦初の心臓手術（動脈管開存結紮術）や開心術が行われるなど、日本における心臓血管外科の歴史はまさにこの女子医大から始まっております。多くの経験に基づく揺るぎない伝統は現在に至るまで引き継がれ、我々心臓血管外科教室の根幹を成しております。
当科では新生児から高齢者の方までのあらゆる心臓・大血管疾患に対して外科治療を行っております。患者さまにとって体の負担が少ない低侵襲治療の標準化を進めており、大血管に対する血管内治療（ステントグラフト）や経カテーテル的大動脈弁留置術（TAVI）、さらには最新のデバイスを用いた低侵襲心臓手術（MICS）での冠動脈バイパス術、縫合不要の人工弁（sutureless valve）を用いた弁膜症手術を導入しております。また、重症心不全の患者さまに対しては、植込み型補助人工心臓手術や心臓移植、さらに細胞シートを用いた再生治療など、本学ならではの高度先進医療を積極的に行っております。
各領域に高度な技術と経験を有する専門医を揃え、循環器内科、循環器小児科、麻酔科、集中治療科、看護部、臨床工学部と密接に連携し、良質で安全なチーム医療に取り組んでおります。スタッフ全員が患者さまに寄り添った医療を実践していくことをお約束致します。

循環器小児科
Department of Pediatric Cardiology

胎児、新生児、小児から成人までの先天性心疾患に対する診断、治療を行っています。その診断、治療レベルは日本で最高のものとなっています。小児の不整脈、成人の遺伝性不整脈、小児の心筋疾患、川崎病、肺高血圧症に対する最先端の診断、治療も行っています。胎児の心臓検診（胎児診断）や心疾患のある母胎の診療も行っています。また小児と成人に対するカテーテル治療の数と治療成績は日本でも有数の施設のひとつとなっています。小児の不整脈や先天性心疾患に合併した小児や成人の不整脈に対するカテーテルアブレーションも日本で最高の成績をあげています。心臓血管外科や循環器内科と密接に連携して、高度な、しかも安全な医療を提供しています。未熟児で先天性心疾患がある場合には、母子総合医療センター新生児部門（NICU）と協力して治療を行います。先天性心疾患成人で、妊娠されたご婦人の場合も母子総合医療センター母性部門と協力して、妊娠と分娩について適切な医療を提供します。外来は予約制を整備し、常に患者サービスの向上に努めています。

消化器内科
Department of Medicine

消化器内科は、食道、胃、十二指腸、小腸、大腸、肝臓、胆嚢、膵臓のすべての消化器疾患の内科診療を担当しています。消化器疾患の予防、診断、治療などの内科診療とともに、病気の成因や病態の解明のための基礎的な研究から新しい診断法や治療法の開発などの研究まで幅広く取り組んでいます。診療チームは食道・胃・十二指腸・小腸（上部消化管）、大腸、肝、胆・膵と大きく4つに分かれ、それぞれの分野の専門医がチームとなって患者さんの診療にあたっています。いずれの診療チームにも経験豊富な学会専門家が多数そろっております。最近は、胃がん、肝臓がんなどの悪性疾患も内科的治癒が可能となりました。胆石治療や胃潰瘍出血なども内視鏡治療が主役です。これらの治療にあたる当科医師は、種々の技術を習得した医師達です。劇症肝炎、重症急性膵炎などの重篤な病気の治療経験も豊富で、多くの患者さんを救命しています。治療の選択肢が増えた現在、当科では個々の患者さんに応じたオーダーメード治療を提供しています。

消化器・一般外科
Department of Surgery

専門性の高い高度医療を提供するため、上部消化管外科、下部消化管外科、炎症性腸疾患外科、肝胆膵外科の４つの分野から構成されます。当科の大きな特徴は、外科だけではなく内科や化学療法科や放射線科と連携して、患者さん第一の治療を実施していることです。
上部消化管外科では、食道癌、胃癌、GIST、食道裂孔ヘルニアなどの上部消化管疾患に関わる外科治療や、肥満症に対する減量・代謝改善手術などを行なっています。特に、食道癌・胃癌に対しては、da Vinciによるロボット支援下手術と周術期の化学（放射線）療法を組み合わせて、治療成績の向上に努めています。
下部消化管外科では、大腸癌を中心に専門的かつ最新の治療を行っています。ロボット手術の導入や、クリニカルパスによる早期回復・退院を実践しています。進行大腸癌では、術前治療として薬物治療や放射線治療を適宜計画して治療成績の向上を図っています。手術時の腹腔鏡画像の臓器認識などに人工知能AIを取り入れる研究を行っています。
炎症性腸疾患外科では、潰瘍性大腸炎に対しては大腸全摘・回腸嚢による再建術（(回腸嚢肛門吻合術や回腸嚢肛門管吻合術などの肛門温存術式を腹腔鏡手術で行い、またクローン病に対しては腹腔鏡手術を第一選択として短腸症候群の回避など長期的な QOLの向上を考慮して、内科と連携し治療にあたっています。
肝胆膵外科では、消化器内科の肝胆膵グループや病理医と連携しながら、すべての肝胆膵疾患の診断から治療までを取り扱っています。肝胆膵手術では癌の根治性と膵周辺臓器の機能温存とのバランスを常に考慮して、癌郭清手術から臓器温存手術まで多種多彩な手術を行っています。

消化器内視鏡科
Department of Endoscopy

消化管（食道・胃・十二指腸）内視鏡検査は年間約9000件、大腸内視鏡検査は約5000件と多数行っています。当科は、消化管腫瘍に対する内視鏡診断と低侵襲内視鏡治療（ESD）を中心に診療を行っており、当科指導医は食道、胃、大腸全ての消化管ESDを非常に安全に行っており、その症例数は国内でもトップクラスを誇っています。また、拡大内視鏡も含めた内視鏡診断にも力をいれております。
早期胃がんで範囲診断が難しい患者様、他施設で内視鏡治療が困難と診断された大腸腫瘍の患者様もぜひ当院にご紹介いただけますと精密検査で適応をしっかり判断したうえでベストの治療を選択させていただきます。外来初診日から数えて、3週間以内に治療を行えるようにスケジュールを組み、患者様にご満足いただけるように努めております。
また、内科・外科およびメディカルスタッフと連携し、チーム医療を推進し、安全で質の高い内視鏡診療をモットーに診療にあたっております。

脳神経内科
Department of Neurology

脳神経内科は脳、脊髄、末梢神経、筋肉の病気を対象としています。症状としては頭痛、めまい、しびれ、歩行障害、ふるえ、物忘れ、言語障害、意識障害などがあり、主な病気には脳卒中、パーキンソン病、アルツハイマー病、てんかん、片頭痛、多発性硬化症、筋萎縮性側索硬化症、末梢神経障害、筋炎、脳炎、髄膜炎、脊髄炎などがあります。女子医大の脳神経内科は全国の大学病院の中でも最も多くのスタッフが最も多くの患者さんを診療しており、神経内科専門医と脳卒中専門医の数は全国有数を誇っています。脳卒中、神経心理、神経免疫、神経生理、末梢神経筋疾患などの研究グループは全国でもトップクラスの研究成果と診療実績を誇っており、特定の分野に片寄らない、オールラウンドな診療を特徴としています。脳卒中急性期治療として脳神経外科と共同で脳卒中集中治療室（SCU）を開設、血栓溶解療法、血栓回収療法、細胞治療（臨床治療）に取り組んでいます。多くの大規模臨床試験で主導的な役割を果たしており、診断や治療が困難な神経疾患について多くの紹介があり、先進的な検査や治療に取り組んでおり、さらなる診療成績の向上を目指しています。

脳神経外科
Department of Neurosurgery

脳神経外科では最新の診断治療機器と治療方法を導入し、全国有数の症例数の治療を行っています。小児から高齢者、脳腫瘍、脳血管障害、機能神経外科、小児脳神経外科、ガンマナイフ、脳血管内治療などの全ての領域で診療しています。各専門分野は非常に充実しており、迅速な対応と適格な治療を推進しています。脳腫瘍の治療では手術室にMRIを導入し手術の進行とともにMRI検査を行い、脳機能温存を図りながら最大限の摘出を行っています。また、脳動脈瘤、閉塞性脳血管疾患などに対しても血行再建術（Low flow bypass, High flow bypass, CEAなど）に独自の手術手技を導入し良好な結果を得ています。特にもやもや病に対しては新たなバイパス手術も開発しています。良性脳腫瘍に対しても術中モニタリングを駆使した摘出術により安全で確実な治療を実現しています。機能神経外科においてはジストニア、振戦、パーキンソン病などに対して最新治療を行っています。ガンマナイフ治療では脳腫瘍や脳動静脈奇形だけでなく、難治性疼痛、脳機能障害、てんかんなどにも応用を図っています。研究に関しては先端生命医科学研究所や基礎医学講座などとの連携を図り、再生医療、脳虚血の病態解明、悪性脳腫瘍の病態解明、各疾患の遺伝子的解明、良性脳腫瘍の境界領域の病理組織学的検討などを行っています。

腎臓内科
Department of Nephrology

当科は「患者さんとともに」を基本として日々の診療に励んでおります。診療内容は、腎炎・ネフローゼ症候群・腎不全などの腎疾患全般および膠原病や高血圧症の診断と治療です。とくに腎生検を積極的に実施して正確な診断と適切な治療を心掛け、多発性嚢胞腎など遺伝性疾患の新規治療も積極的に行っています。また、血液透析(HD)、腹膜透析(PD)、腎移植後管理を含めた腎代替療法全般にわたる診療を担当しています。かかりつけ医との病診連携を重視し、慢性腎臓病の早期段階から患者教育も含めた積極的な介入を行うことで重症化予防や合併症予防を心掛けています。また、透析施設との病診連携を通じて、新規透析導入および透析患者さんの合併症管理も数多く行っております。最近では移植後の腎障害の診断・治療も行っております。セカンドオピニオン外来を開設し、難治性疾患や治療方針の決定が困難なケースにも対応しています。

泌尿器科
Department of Urology

当科は腎臓がん・前立腺がん(前立腺腫瘍センター)、膀胱がん、腎盂がん、尿管がん、副腎腫瘍などの泌尿器科腫瘍、腎移植を主体とした腎不全医療、女性排尿障害センター、小児泌尿器疾患などの専門外来を中心に診療を行っています。泌尿器腫瘍の手術のほぼ全てはロボット支援手術を行なっており、年間約400例の手術を実施しております。低侵襲手術は患者さんの身体的負担を減らせるともに、入院期間短縮など医療経済的にも社会に貢献しております。さらに、腎癌に対するロボット支援腎部分切除術、前立腺癌に対する神経温存ロボット支援前立腺全摘に代表される機能温存手術も積極的に行なっております。また、ロボット支援手術については腫瘍関連のみならず、ロボット支援腎盂形成術、ロボット支援仙骨膣固定術などの良性疾患に対しても多くの実績があります。腫瘍関連については、手術のみならず抗がん剤治療、放射線治療も泌尿器科を中心に行なっております。抗がん剤治療については、多くの臨床治験を手がけており、適切な治療と知識を届けることを心がけております。また腎移植の10年生着率は90%を超えつつあります。泌尿器科チームとしては約150例腎移植を行っております。生体腎移植が中心となっておりますが、脳死下腎移植に対応できるよう、体制を整えております。またこれら専門外来だけでなく前立腺肥大症、尿路感染症などの泌尿器科全般にわたる診療も行っています。泌尿器科は安全で信頼される診療を提供できるよう、日々努めて参ります。

腎臓小児科
Department of Pediatric Nephrology

当科は、先天性腎尿路疾患から腎炎・ネフローゼ症候群、そして急性・慢性腎不全まであらゆる小児期腎泌尿器疾患を診療しています。小児腎臓病診療には、さまざまな職種の医療従事者が力を結集して対応するチーム医療が必要不可欠です。当科は、東京女子医大病院内の診療科(泌尿器科、腎臓内科、血液浄化療法科、小児外科、小児科、循環器小児科、新生児科など)や同病院内の種々の部門と緊密に連携できる環境に恵まれています。腎生検は年間約60～80例(固有腎20～30例、移植腎40～50例)行っており、高度で専門的な小児腎臓病治療として、腹膜透析導入を2～3例／年、維持血液透析導入を3～5例／年、そして腎移植を15例／年程度施行しています。血液型不適合例や巣状分節性糸球体硬化症といった、特別な処置を要する腎移植についても豊富な経験を有しています。それとともに、小児腎臓病の新たな治療法の開発につながる基礎研究にも力を注いでおり、さらなる診療水準の向上に努めています。

血液浄化療法科
Department of Blood Purification

血液浄化療法は、血液中の有害な物質を除去する治療法です。末期腎不全に対して血液透析、血液濾過透析、腹膜透析があり、免疫異常や敗血症などに対して血漿交換や吸着療法などがあります。透析治療ベッド48床、1日2交代と大学病院に付属する透析室としては、国内最大規模です。当科はわが国の透析医療の黎明期から先駆的な役割を担ってきました。そのため、血液浄化療法全般の教育・研修施設としての機能も併せ持っています。透析の診療業績においては、年間外来12500件、入院9200件の透析を行っており、新規透析導入は年間約100名、血漿交換や吸着療法などの特殊治療を年間約500件行っています。さらに、腎臓内科、泌尿器科、腎臓小児科、各科と協力して、保存期慢性腎臓病の診療から、移植、医用工学にもスペクトラムを広げており、視野の広い医師およびメディカルスタッフが集まり、さらにその育成に努めています。私たちはあらゆる血液浄化療法を用いた集学的医療を目指します。

糖尿病・代謝内科
Department of Diabetology and Metabolism

糖尿病は全身にさまざまな合併症をきたすことから、糖尿病・代謝内科の外来では、糖尿病一般外来に加え、糖尿病性腎症・末期腎不全(腹膜透析外来を含む)、神経障害、心臓病、フットケア、肥満・脂質異常症、妊娠、小児・ヤング糖尿病、高齢糖尿病、遺伝子医学などのサブスペシャリストが、それぞれの患者さんの合併症や病態に対応して診療しています。また、他職種とも協働することによって、チーム医療の先駆的な取り組みを行っております。多数の看護師、検査技師、管理栄養士などのメディカルスタッフが日本糖尿病療養指導士認定機構が認定する認定療養指導士(CDEJ)の資格を有しており、患者さんのセルフケアを全力で支援しております。

高血圧内科
Department of Hypertension

高血圧疾患と内分泌疾患の両方を扱っています。高血圧疾患においては①高血圧になってしまったホルモンなどの原因の精査、②家庭血圧や24時間血圧の評価、③全身の動脈硬化の評価、④薬物治療だけではない最新の高血圧治療の提供、を行っています。また、「脳卒中や心筋梗塞を決して引き起こさせない」ことを目標に、血圧をコントロールするだけでなく、内分泌学的視点から「高血圧を治し」一生の間薬を飲み続ける必要がなくなるための研究と治療を行っています。内分泌疾患においては、先端巨大症や悪性褐色細胞腫などの下垂体・甲状腺・副甲状腺・副腎・膵臓に発生する疾患や腫瘍が主な対象ですが、成長障害、骨粗鬆症、肥満症などの新しいホルモン関連疾患も、経験豊富な内分泌代謝科専門医、甲状腺専門医、高血圧専門医が診療しています。外来では、超音波検査室、負荷試験室を備えて高血圧と内分泌疾患の早期診断と治療に努めており、病棟では内科と外科が協力して治療にあたり低侵襲治療を実践しています。

内分泌内科
Department of Endocrinology

内分泌内科は、ホルモンを作る内分泌臓器の障害により、ホルモン分泌の異常が起こった状態か、そのホルモンが作用する標的臓器の異常により、ホルモン作用の異常が起こった疾患を対象としています。主な疾患としては先端巨大症、クッシング病、プロラクチノーマ、下垂体機能低下症、尿崩症などの間脳下垂体疾患、バセドウ病、橋本病、甲状腺癌などの甲状腺疾患、原発性副甲状腺機能亢進症、骨粗鬆症などの副甲状腺・カルシウム代謝疾患、クッシング症候群、原発性アルドステロン症、褐色細胞腫、副腎癌、先天性副腎過形成などの副腎疾患、ターナー症候群などの性腺疾患、多発性内分泌腫瘍症などの遺伝疾患があります。これらの疾患に対して日本内分泌学会の診療ガイドライン作成に関わった、また厚生労働省の間脳下垂体機能障害に関する調査研究班、副腎ホルモンに関する調査研究班の班員である経験豊富なスタッフが診療を行います。また先進的な診断・治療にも取り組むと共に、個々の内分泌疾患患者さんに対する最善の診断・治療を内分泌外科、脳神経外科、泌尿器科などの関連する診療科と協力して行っていきます。

内分泌外科
Department of Endocrine Surgery

安全第一の診療を心掛けております。
甲状腺や副甲状腺、副腎などホルモンを作る臓器の腫瘍やホルモン過剰症の診断と治療を専門としています。甲状腺がんの手術方針を決めるにはがんの進行度合いを見極めることが重要ですが、なるべく甲状腺のはたらきを温存する手術を提案しています。副甲状腺機能亢進症では摘出すべき病変の位置を正確に診断することにより完治を実現しています。副腎腫瘍に対しては腹腔鏡を使った、体に負担の少ない外科治療を基本としております。また、遺伝性疾患である多発性内分泌腫瘍症やまれな内分泌がん（甲状腺髄様がん、甲状腺未分化がん、副甲状腺がん、副腎がん、悪性褐色細胞腫）なども経験豊富なスタッフが診療にあたっております。内分泌領域の年間手術数は約200例です。

乳腺外科
Department of breast surgery

乳腺外科では乳癌の診断、治療を中心に全人的な医療の提供に努めています。
乳房温存療法では整容性に配慮した乳房温存術（オンコプラスティックサージャリー）を行っています。また乳房切除術が必要な場合は形成外科と連携をとりながら乳房再建術、ご希望のある場合には同時（一次一期）自家組織再建も可能です。
遺伝性乳癌卵巣癌症候群の乳癌患者さんに対しては、ゲノム診療科、婦人科、形成外科との連携のもと、リスク低減のための対側乳房切除術、卵巣卵管切除術を、画像診断学・核医学科との連携でMRIを併用した強化スクリーニングも実施可能です。周術期の化学療法に対しては脱毛予防のための頭皮冷却も行っております。挙児希望の方には、婦人科と連携して妊孕性温存のために受精卵凍結や、不安の強い患者さんには乳癌看護認定看護師による身体的、心理的、社会的、スピリチュアルな多方面からのサポートを提供しています。非手術を希望される方で腫瘍サイズなどの条件を満たす場合には放射線腫瘍科との連携で重粒子線治療という選択枝も可能な場合があります。
安全で信頼される乳癌診療の提供を念頭に日々邁進しています。

母子総合医療センター
Maternal and Perinatal Center

母体・胎児医学科
Maternal-Fetal Division

総合周産期母子医療センターの中で、一般産科診療とともにハイリスクの母体・胎児の管理が可能なMFICU（母体・胎児集中治療室）の分野を担当しています。重症例に対しては、関連各科と密接に連携しながら、内科的・外科的合併症を有する妊婦、前置胎盤などの産科合併症、また早産児出生・胎児異常が予想される分娩などあらゆる母体・胎児合併症に対応できる体制がとられています。全ての分娩において高い満足度が得られるよう、助産師を含めたスタッフが一致協力して、診察にあたっています。麻酔科と協力して無痛分娩の要望にもお応えしています。さらに、母乳哺育の推進や育児相談にも積極的に対応しています。

新生児医学科
Neonatal Division

周産期医療のなかで、新生児疾患の治療を受け持ちます。早産児をはじめ、出生時の適応障害を起こした児、母体合併症の影響を受けた児、先天異常を有する児などの治療に対応できる新生児集中治療室（NICU）が整備されています。当NICUは全国的にも大規模な新生児医療施設で、総合周産期母子医療センターに指定されています。また、高度専門医療施設として、院内出生児および院外からの紹介症例に、24時間対応しています。一方で、比較的リスクの低い新生児の生後の管理も行っています。新生児期は、人生のなかで一番不安定な時期であり、出生後の適応状態に問題がないかを確認し、無事に退院の日を迎えられるように全力を尽くしています。

呼吸器内科
Department of Medicine

近年の生活環境の変化や人口の高齢化に伴い、呼吸器疾患の患者数は増えています。当科では、気管支喘息、長引く咳（慢性咳嗽）、慢性閉塞性肺疾患（COPD）、肺がん、肺炎、間質性肺炎、サルコイドーシス、呼吸不全、睡眠時無呼吸症候群など、あらゆる呼吸器疾患の診断、治療を行っています。喘息患者には呼気中一酸化窒素濃度の測定、喘息日誌を用いた管理指導を行い、また、標準治療を行っても改善しない重症喘息に対しては、生物学的製剤の抗IgE抗体、抗IL-5抗体、抗IL-5受容体α抗体、抗IL-4受容体α抗体、抗TSLP抗体を100例以上行っております。また、エコー下気管支鏡およびクライオ生検を本邦でも初期に導入しており、肺がんや間質性肺炎などのびまん性肺疾患に用い診断率が向上し、肺がんに対しては呼吸器外来、放射線科、病理医と包括的診療を行っています。他施設では行えない気道の綿毛の検査など、特殊な検査により原発性綿毛機能不全など稀な疾患の診断・治療にも実績があります。禁煙外来、呼吸リハビリテーションなどを通じて予防医学・管理医学の充実を図り、在宅酸素療法や在宅医療など、地域医療連携を行っています。当科では、どの曜日に受診されても、各疾患の専門医がいる体制になっているのが特徴です。安心安全の医療を心がけ患者様に適切な治療を提供しています。

呼吸器外科
Department of Thoracic Surgery

肺がん、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍、気胸、膿胸、肺嚢胞、漏斗胸などの呼吸器外科的疾患全般について呼吸器内科と連携して手術、診療を行っています。
当科では、肺がん、縦隔腫瘍に対するロボット支援下手術を積極的に行っています。当科では2012年よりロボット手術をいち早く導入し、経験を蓄積してきました。ロボット手術が保険収載となった2018年4月以降、症例数は飛躍的に増加し、全国でトップの施設となっています。そして、手術の質が高く評価され、他施設の医師がロボット手術の見学を行う施設として認定されています。従来の胸腔鏡下手術においても、豊富な経験を生かして治療を行っています。早期肺がんや転移性肺腫瘍に対する区域切除では、症例毎に術前3Dモデルを構築し、ロボット手術ではさらに、遠赤外線を用い、区域間を同定し、安全で正確な手術を行っています。悪性疾患の治療では、患者さんの状態や病状に合わせ、縮小手術を選択する場合もありますが、局所進行病変に対しては、必要に応じて化学療法などを行ったのち手術を施行しています。また、肺がんなど悪性腫瘍には、集学的治療を積極的に行っています。また、腫瘍による中枢気道狭窄に対しては、気管支鏡下レーザー焼灼術、ステント挿入を行っています。当院は大学病院という特性上、様々な併存疾患を持つ患者さんが多くいらっしゃいますが、他科との連携を重視し、個々の患者さんに対して治療を安全に提供できる体制を整えています。

膠原病リウマチ内科
Department of Rheumatology

全身性エリテマトーデス、血管炎症候群、多発筋炎・皮膚筋炎、全身性強皮症、抗リン脂質抗体症候群、ベーチェット病、成人スチル病、シェーグレン症候群などの膠原病、関節リウマチ、脊椎関節炎、痛風など関節炎疾患の診断と治療を行います。小児リウマチ科、整形外科（リウマチ）と連携し、患者様のライフステージや関節機能に幅広く対応できる診療体制を整えています。これらの疾患のガイドライン作成には当科の医師が中心的な役割を担っており、分子標的治療を含む標準的な治療を踏まえつつ、個々の患者様の状態にあった治療を行うことを心がけています。病棟では経験豊富なリウマチ専門医が医療チームを牽引し、先進的かつ高度な診療体制を提供しています。

整形外科（リウマチ）
Department of Orthopedic Surgery

整形外科（リウマチ）は整形外科リウマチ班の外来部門です。整形外科（リウマチ）では国内最大規模となる毎年約300例のリウマチ性疾患の関節外科手術を行っており、リウマチ性疾患により侵されるほとんどの関節を治療対象としています。以前から膝や股関節の人工関節を積極的に行っていますが、近年は特に足趾や手指といった小関節の手術が増えています。足の外科では最近の関節リウマチ治療の成績向上に合わせ、関節修復まで考慮した手術方法を採用しています。また患者さんのニーズを踏まえ、全国的にはまだ数少ない人工足関節置換術も積極的に行っています。手の外科では人工指節関節手術や人工肘関節手術などに積極的に取り組んでいます。薬物療法で免疫抑制剤やステロイドなどを使用する患者さんにも、豊富な経験をもとに安全な治療を行っています。

小児リウマチ科
Department of Pediatric Rheumatology

成人で発症するリウマチ性疾患（膠原病）の多くを小児も発症します。同じ病名でも成人とは病態が異なる場合があり、病名に“若年性”とつけられるものがあります。症状や治療の選択、今後の経過などが成人とは異なり、成長期ならではの配慮が必要となります。
小児リウマチ科では小児リウマチ性疾患・自己免疫性疾患（若年性特発性関節炎（JIA）、全身性エリテマトーデス（SLE）、若年性皮膚筋炎（JDM）、混合性結合組織病（MCTD）、ベーチェット病、シェーグレン症候群、抗リン脂質抗体症候群）、血管炎症候群（高安動脈炎、結節性多発動脈炎など）に加えて家族性地中海熱、クリオピリン関連周期熱症候群（CAPS）、TNF受容体関連周期性症候群（TRAPS）などの自己炎症疾患・周期性発熱症候群の診断と先進的な治療を展開しています。当施設ならではの成人科と一貫した体制下で、成人期に向けた移行支援にも取り組んでいます。
外来診療は小児科ではなく、リウマチ科でおこなっています。

ゲノム診療科
Institute of Medical Genetics

当科は2004年5月に東京女子医科大学の附属医療施設として開設し、2018年5月より東京女子医科大学病院のゲノム診療科としてゲノム医療を実施しております。遺伝や遺伝子に関わる様々な相談や検査に対応し、患者さん本人と家族への十分な遺伝カウンセリングと医療を提供いたします。遺伝学的な解析を元にして治療を実施する医療が拡がっています。日本を代表とした国際共同治験の成果によって難病のひとつである脊髄性筋萎縮症において遺伝子治療も実現しました。染色体や遺伝子に関する遺伝カウンセリングを臨床遺伝専門医、認定遺伝カウンセラー、看護師、公認心理士など多職種で担当し、患者さんやご家族のよりよい日常生活のために包括的な支援を実施しております。

女性センター
Women's Center

女性センターは、女性特有の器官や疾患、女性医師を希望する患者さん（女性）の診療を行う部門として平成30年5月に開設されました。いろいろな診療科の女性教授を主体としたスペシャリストの女性医師、メディカルスタッフにより、専門性の高い懇切丁寧な診療を行っています。乳がんの早期診断、治療、化学療法、緩和ケアをはじめとする乳腺疾患の診療、大腸がん及びその他の大腸・肛門疾患の診断、大腸内視鏡検査、シミ・いぼなどの美容治療、内科系疾患（ホルモン異常、呼吸器疾患、糖尿病、肥満症、脂質異常症、心臓病、認知症、頭痛、てんかん）、小児リウマチ性疾患、自己炎症疾患、働く女性の健康管理などの診察、遺伝学的検査の相談などを行っています。関連する各科と連携し、本学ならではの高度で心のこもった女性医療を推進しています。

救命救急センター
Critical Care and Emergency Medical Center

当センターは、厚生労働省指定の三次救命救急センターです。東京消防庁、近隣県の消防署、他院からの三次救急患者さんを24時間365日、疾患を問わずに受け入れております。心肺停止状態、多発外傷、多臓器不全、脳血管障害、ショック、重症中毒など、緊急度が高く、重症度が高い患者さんが対象となります。高度先進医療と専門性の高い院内各科が揃っていますので、他科との連携により、特殊疾患やどのような基礎疾患をお持ちの患者さんの急変に対しても対応が可能です。センター内には、専従の救急医療専門医、集中治療専門医、外科専門医、脳神経外科専門医、整形外科専門医のみならず臨床工学技士、臨床検査技師もおり、急性血液浄化療法、体外循環、脳低温療法、高気圧酸素治療など、ICUでは、高度な集中治療を提供しております。ICU退室後の専用の一般病床も有しており、一貫した治療が継続できます。東京DMAT、日本DMATにも加入しており、事故や災害医療への対応も備えております。

がんセンター
Cancer Center

がんは2人に1人がかかる身近な病気になりましたが、多くの方が病名を告げられるとショックを受け、治療過程においても悩み揺れ動く気持ちを体験します。がんセンターでは、医師をはじめ看護師、薬剤師、放射線技師、管理栄養士、臨床心理士、リハビリテーション療法士、ソーシャルワーカー等が活動しております。診療科単位にこだわらず、横断的な組織として当センターの基本理念である「至誠と愛に基づく全人的ながん医療」の提供に努めております。医療の進歩から治療も多様化しており、がん診療に携わる診療科の医師だけではなく、メディカルスタッフが参加するキャンサーボードでは、患者さんの思いや意向を大切にしながら患者さん1人1人に寄り添った治療やケアについて検討しています。また、緩和ケアチームによる専門的な緩和ケアの提供や、がん相談支援センターでの相談対応の他、患者さんやご家族同士の語り合いの場として「カフェすまいる」を開催しております。また、新しくがんゲノム診療室を開室し、ゲノム医療に対する取り組みも行って参ります。がんと診断されたときから患者さんやご家族が少しでも安心して治療やケアが受けられるような体制づくりを目指しております。

アレルギー総合医療センター
Allergy Medical Center

2019年2月に東京都のアレルギー専門病院に指定され、2020年2月にアレルギー総合医療センターが設立されました。アレルギー性鼻炎、花粉症、咳喘息、喘息、蕁麻疹、アトピー性皮膚炎、薬剤アレルギー、食物アレルギーの診断、治療を行います。アレルギー疾患は、内科、小児科、皮膚科、耳鼻咽喉科、眼科、そしてリウマチ科など多岐にわたるため、当センターでは、各科アレルギー専門医が協力して診察にあたり、横断的に診断や治療をしてまいります。アレルギーの診断に最も重要な免疫グロブリンIgEは、1966年に石坂公成、照子（女子医専の卒業生）夫妻により発見され、現在では、抗IgE抗体が慢性蕁麻疹や重症喘息の治療にも貢献しています。この抗IgE抗体を含め、生物学的製剤の加療を行っている患者さんは100例以上に及びます。また、アレルギー専門医、医療スタッフの育成、入院患者への高度な治療・教育の提供を行っております。アレルギー疾患の患者数は増加しており、医療現場のみならず学校や職場などでも対応や対策が重要視されています。最新の知識と技術を持った医師が対応し、安心、安全で、適切な診療を提供しています。

研究推進センター治験管理室

Clinical and Academic Research Promotion center(CARP)

本学の研究活動を統括管理し、臨床研究の推進を目的として、研究推進センターは設置されました。
新しい治療法や薬が開発される時には、それがどのような病状の患者さんにどの程度役立つか、また、安全性に問題はないかなどを患者さんにご協力いただきながら確かめる臨床研究が行われます。その中でも新薬や新しい医療機器の製造承認を得るために行う試験のことを治験といいます。臨床研究は人を対象としていますので、法律や基準で患者さんの人権保護、記録などの保存などが定められています。また、治験審査委員会や各種の倫理委員会の承認を経て研究は行われています。
研究推進センター治験管理室は、これらの臨床研究が安全にかつ適切に行われるように研究者や依頼する製薬企業を支援することとともに、臨床研究に参加される患者さんの支援を行っています。院内外の方々と連携し、患者さんのもとに新しい治療を届けるために努めています。

看護部
Allergy Medical Center

看護部では、患者さん・ご家族の「いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護」の提供を目指しています。外来では、受診される患者さんお一人おひとりが受診の目的を達成され、疾病とともにその方にあった生活ができるような支援やケアを提供しています。入院病棟では、24時間365日最も身近な存在として、安全で安心できるような看護体制で対応しています。また、入退院支援センターを通じて外来と病棟の看護職が連携して、入院前から退院後の患者さんとご家族の生活を見据え、地域を含む多職種と連携し、継続した看護ケアを行っています。限られた入院期間の中で、迅速に患者・家族のニーズを把握し、意思決定を支援し、生活者の視点から住み慣れた地域へ安心して戻れるよう活動しています。さらに、看護の専門性を発揮できる専門・認定・診療看護師、エキスパートナース等の看護スペシャリストをキーパーソンとして、患者さんとご家族にとって最善の医療、良質で安全な看護を提供できるよう努めています。

薬剤部
Department of Pharmacy

薬は病気の治療にとても大切ですが、必ずしも良いことばかりではありません。薬の良い面、悪い面、より効果的な使用法、気をつけなければならないことなど、薬に関するさまざまなことを患者さんに正しく知ってもらうことで、患者さんといっしょに安心・安全で質の高い薬物治療が行えます。薬剤部では患者さんの薬を調剤するばかりではなく、全ての患者さんに適切な薬物治療が提供できるように、さまざまな薬剤業務に取り組んでいます。市販されていない特別な薬の開発や調製を行う部門（製剤試験室）、抗がん剤など注射剤を無菌的に混合調製する部門（注射調製室）、入院の患者さんのベッドサイドで薬の説明や薬の適正使用を総合的に管理する部門（臨床薬剤管理室）、安全性情報や新たな使用法など様々な薬の情報を集めて病院内に情報を伝達する部門（医療品情報室）、調剤を行う部門などです。各部門が病院内の他の診療部門と連携を図ると共に、薬剤師が患者さんの身近な距離にいることで、日々患者さんの薬物療法の安全確保と最適化に努めています。

中央放射線部
Department of Radiological Services

中央放射線部は、高度な画像診断と放射線治療を行うために、多くの大型放射線関連機器を揃えた我が国有数の放射線診療部門です。
現在画像診断のために関連機器は、320列MDCTを含む7台のCT装置、MRI装置は3Tを含む8台、PET/CT、SPECT/CT・SPECT合計6台、心臓カテーテルなどの経皮的に診断・治療を行う血管撮影装置は10台、他には乳がんの早期発見のためにマンモトーム、トモシンセシス等を装備した多機能透視装置などが稼働しています。
放射線治療については、高精度の強度変調放射線治療が可能なCT搭載のリニアックなど3台、腔内照射装置とガンマナイフ、10台を超える放射線治療計画装置が活躍しています。
近年急速に進歩する画像診断技術や放射線治療技術をいち早く取り入れて日常の先端医療に結びつけていくためには、中央放射線部の画像診断・放射線治療の専門医、診療放射線技師、医学物理士、専門看護師だけにとどまらず、各部門との連携が何より重要です。
あらゆる専門性を取り入れた“協同によるチーム医療”をモットーに、中央放射線部の診療体制を更に整えてまいります。

中央検査部
Department of Central Clinical Laboratory

中央検査部は心機能検査、超音波検査、脳波・節電図検査、呼吸機能検査および内視鏡検査などを行う生理検査部門と血液、尿などの体液や分泌物に含まれる生化学的成分、免疫血清学的成分および微生物、血液細胞、尿中細胞などの形態学的検査を行う検体検査部門及び採血部門で構成されています。当部は総合外来センターに位置し、患者さんが安心して検査を受けられるよう患者サービスに努めるとともに、各検査分野での認定資格の取得等に力を入れて専門性の高い技師育成に努め、より質の高い検査データの提供を行っています。さらに、検体検査においては診療前検査における検査項目を充実させ、迅速な検査結果の返信により、診療部門の診断・治療を遅延なく行うための重要な役割を担っております。検体検査室および生理検査室は、国際標準化機構の国際規格ISO15189を取得しています。

輸血・細胞プロセシング部
Department of Transfusion Medicine and Cell Processing

血液成分の不足があり、他に代替する治療法が無い場合に、足りなくなった血液成分を不足分だけ補うのが輸血療法です。当部では献血から製造される血液製剤を赤十字血液センターから取り寄せ、適切に管理すると共に、血液型・交差適合試験などの輸血検査を実施し、手術室・ICU・病棟・外来に供給する部門です。他の医療機関では薬剤部が取り扱うことの多い、アルブミン・免疫グロブリンなど、血漿成分から製造されるすべての血漿分画製剤の管理供給も行い、特定生物由来製剤全般について、適正使用や医療安全を推進しています。当部採血室では、当院で治療を受ける患者さんから手術に使用する自己血採血を行います。また、悪性腫瘍に対する造血細胞移植や免疫細胞療法を実施するための成分採血を行い、一部は細胞プロセシングセンター（CPC）で細胞成分の調製や活性化培養などを行います。さらに術中出血量抑制目的にクリオ製剤調製、輸血関連免疫学的副作用予防のために洗浄血小板調製、また難治性腹水に対する腹水濾過濃縮処理などの業務で診療を支援しています。その他、先天性溶血性貧血や赤芽球癆などの難治性稀少血液疾患診断のための特殊検査も実施しています。

臨床工学部
Department of Clinical Engineering

高度な医療を提供する当院は、多くの医療機器を使用しています。医療機器には、輸液ポンプ、シリンジポンプ、心電図モニタなどの多くの患者さんに使用される装置、ペースメーカー、人工呼吸器、透析装置、人工心肺装置、補助人工心臓、ECMO(体外式膜型人工肺)などの生命維持装置、そして電気メスからDa Vinciまで高度な手術支援機器、などがあり多岐にわたっています。臨床工学部は、それらの医療機器を患者さんがいつでも安全に安心して使用されるように、日頃から保守点検を行うとともに、医師、看護師などの多職種と連携し、チームの一員としてそれらを操作する業務を担っています。現在、40名の臨床工学技士が在籍し、手術室、集中治療室、心臓カテーテル室、血液浄化療法室、ME機器管理室などの領域で高度な診療支援を行なっています。

栄養管理部
Nutrition Support Unit

栄養管理部では、入院中のお食事の提供、栄養サポート(NST)活動を通して、病態・症状に応じた栄養管理を実施しています。自宅においても食事療養が可能となるよう、入院はもとより外来患者さんへの具体的な食生活の相談・指導も行っています。「食べること」を大切に考え、患者さんの適切な栄養管理を支援するため日々研鑽に努めています。

医療連携・入退院支援部
Social Support Department

地域連携室
当院と地域の医療機関やかかりつけ医の先生方との連携窓口として、外来診療やセカンドオピニオン外来の予約、診療情報提供書などの発送業務を担当しています。また、連携登録医の先生方の連絡窓口及び情報発信を行っています。

入退院支援室
退院に向けて、診療科の医師、看護師等と連携し、病状と介護力に応じて、介護サービスの調整や在宅医療の医師・看護師と連携を図ります。

医療福祉相談室
傷病によって生じる生活上の様々な問題に対し、ソーシャルワーカーが社会保障制度や地域のサービスのご紹介をしたり、地域機関との連携を行ったりしながら相談、対応します。患者さんやご家族にとって安心出来る療養環境や社会生活を共に考え、サポートしていきます。

ベッドコントロール室
予定入院に加え、緊急入院が必要な患者さんの病状を捉えた上で、ご希望に添えるベッドの調整をいたします。

クリニカルパス推進室
クリニカルパスを活用し、チーム医療の推進を行い良質で標準的な医療の提供に取り組んでいます。また、患者さんやご家族のために検査や治療の入院経過が分かりやすいよう患者用パスの作成を支援しています。各診療科や入退院支援室と連携し、患者さんと臨床現場の支援を行っています。

医療安全推進部
Department of Patient Safety Management

医療安全担当部門は、2017年9月に役割・機能を拡充させるために、「医療安全対策室」から「医療安全推進部」に昇格しました。また、「安全対策」から一歩進めて「安全推進」という取り組みを強化するために、名称も現在のように「推進部」変更しています。東京女子医大病院は、医療安全に関する大きな課題を背負っており、他の病院より一段も二段も高いレベルでの取り組みが求められています。そのため、2016年には「医療安全科」を新たに創設し、医療安全を担当する専従医師を確保致しました。その他の職種として薬剤師、看護師、臨工学技士、事務員がおり、多職種で構成される部門として機能強化を図っております。そして、インシデント・アクシデント報告システムにより再発防止策を検討・実施と共に、チーム医療の推進に向けた研修会などを企画し、院内各部署の協力を得て「安全文化の醸成」に努めています。
2019年12月からは、「医療対話推進室」も併設し、患者・家族との信頼関係を基盤として安全・安心な医療の提供を支援できる体制にしております。

総合感染症・感染制御部
Department of Infection Prevention and Control

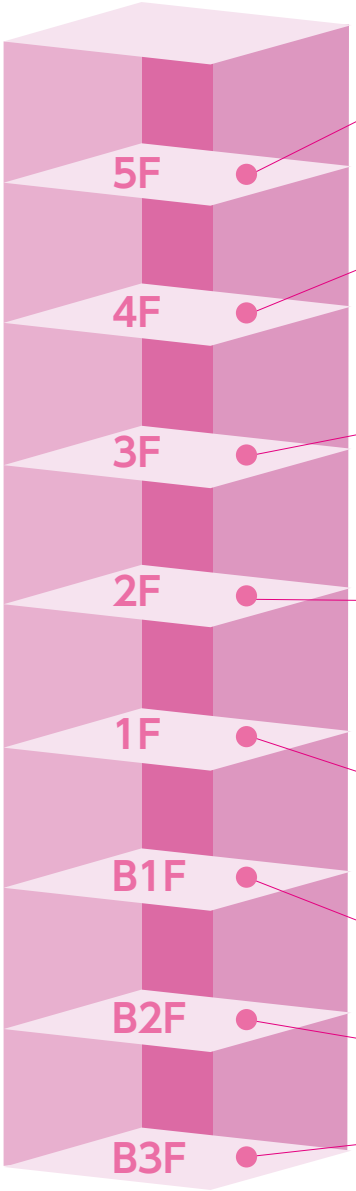
病院に来られる患者さんは、感染症であったり、病気や治療の影響で感染しやすくなったりしておられます。そのため、病院内では、微生物の検出状況を常に把握し、感染の発生や拡大を防止し、感染症患者さんの治療を適切に行うことが重要です。当院では、院内感染対策委員会を組織して感染対策を推進していますが、総合感染症・感染制御部はその中心であり、専門の医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師が活動に従事しています。感染症の検査と治療法に関する助言や抗菌薬の適正使用、手指衛生の徹底と必要な感染対策の実践支援などを行って、患者さんが安心して診療を受けられるための取り組みをしています。

からだ情報館
Patient's Library

「からだ情報館」は、病気やからだについてのさまざまな情報を調べ、相談していただくことを目的とした場所です。また、併設する“がんサロンすまいる”では、がんの治療や暮らしに関する情報をはじめ、がん患者さんやご家族の交流の場である“カフェすまいる”の開催情報をお知らせしています。

外来案内 令和4年6月現在

総合外来センター



- 特別診察室
- トータルヘルスケア・予防医学センター

- 産婦人科
- 母子総合医療センター
- 高血圧内科
- 内分泌外科
- 乳腺外科
- 女性科
- 血液内科
- 麻酔科
- 放射線腫瘍科
- 耳鼻咽喉科
- 歯科口腔外科
- 皮膚科
- 睡眠科

- 腎臓内科
- 泌尿器科
- 腎臓小児科
- 血液浄化療法科
- 糖尿病・代謝内科
- 糖尿病眼科
- 眼科
- 形成外科
- 画像診断・核医学科
- レストラン
- ゲノム診療科

- 消化器内科
- 消化器・一般外科
- 消化器内視鏡科
- 内分泌内科
- 循環器内科
- 心臓血管外科
- 循環器小児科
- 脳神経内科
- 脳神経外科
- 呼吸器内科
- 呼吸器外科
- 生理生体検査室
- ゲノム診療科

- 総合診療科
- 小児外科
- 整形外科
- 小児科
- ペインクリニック
- 会計
- 膠原病リウマチ内科
- 整形外科(リウマチ)
- 小児リウマチ科
- からだ情報館
- 総合受付
- 入退院支援センター
- 売店

- 核医学・PET 検査室
- 放射線検査室
- 検体検査室

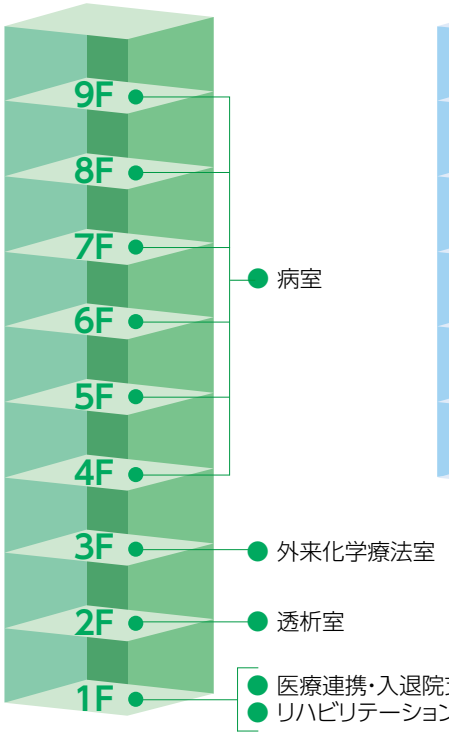
- 医療記録管理室

- 放射線治療室

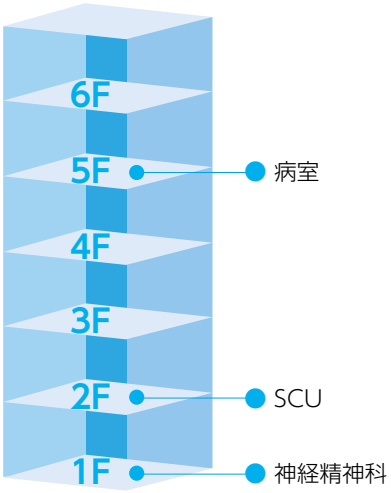
病棟案内

令和5年6月現在

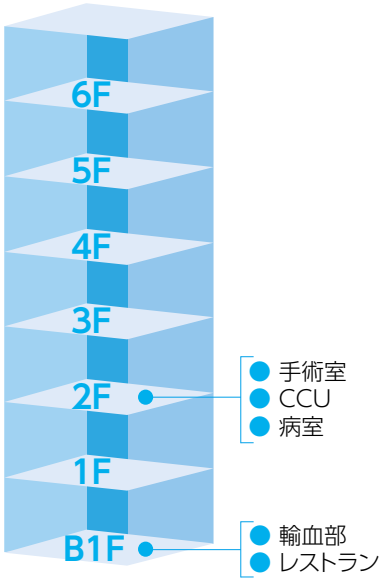
第1病棟



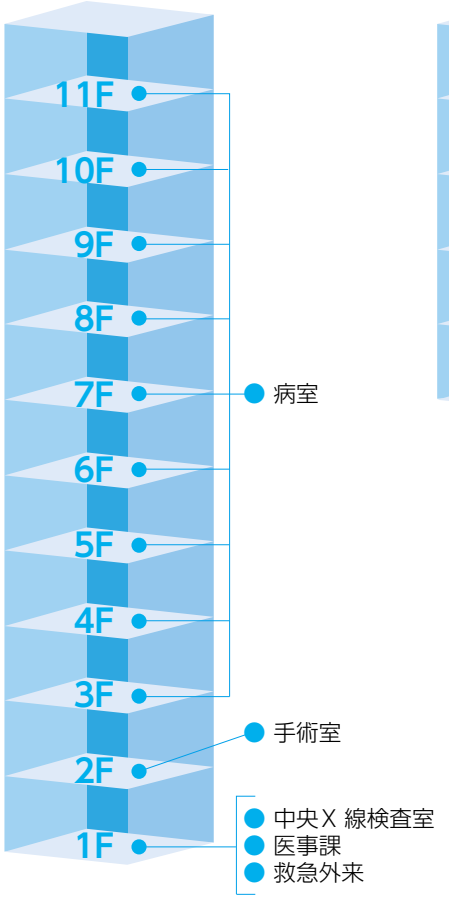
西病棟A



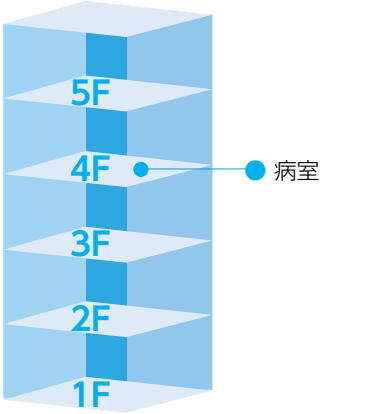
西病棟B



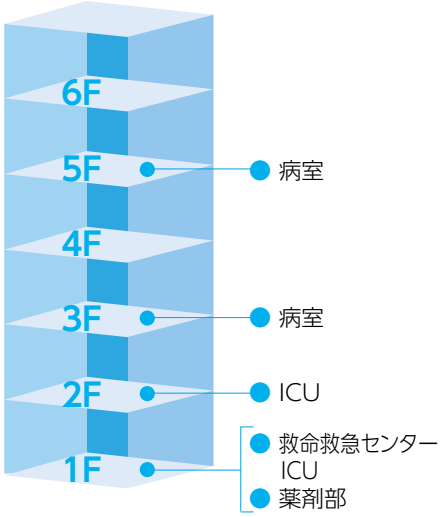
中央病棟



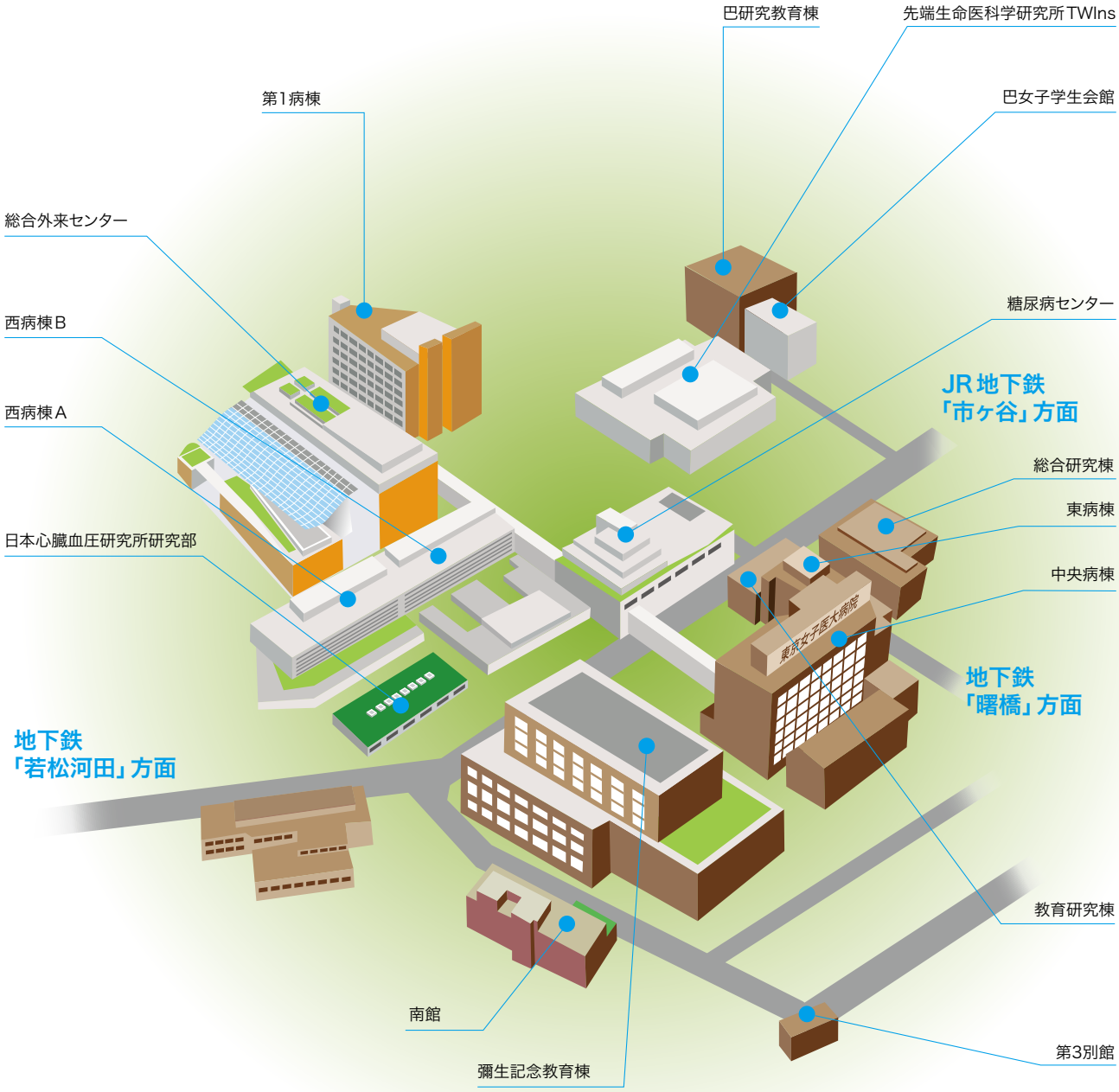
糖尿病センター



東病棟



構内見取図



東京女子医科大学附属施設

●附属足立医療センター
〒123-8558 足立区江北4-33-1
Tel:03-3857-0111

●附属東洋医学研究所
〒162-8666 新宿区河田町8-1
南館1階
Tel:03-6709-9021

●附属八千代医療センター
〒276-8524 千葉県八千代市
大和田新田477-96
Tel:047-450-6000

●附属成人医学センター
〒150-0002 渋谷区渋谷2-15-1
渋谷クロスタワー20 階
Tel:03-3499-1911

ご案内図

◎地下鉄

都営大江戸線	❷若松河田駅下車（若松口より徒歩約5分）
	❸牛込柳町駅下車（西口より徒歩約5分）
都営新宿線	❹曙橋駅下車（A2出口より徒歩約8分）

◎都営バス

宿74系統	❶新宿駅西口→東京女子医大前
宿75系統	❶新宿駅西口→東京女子医大前←❽四谷駅前←三宅坂
早81系統	早大正門→❺馬場下町（早稲田駅）→東京女子医大前←❻四谷三丁目←千駄ヶ谷駅前←原宿前←渋谷駅東口
高71系統	❼高田馬場駅前→東京女子医大前←❾市ヶ谷駅前←九段下

東京女子医科大学病院

〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1　Tel : 03-3353-8111（代表）